1948年前後の台湾新文学運動にかかわる論争と脱植民地化の問題

——『新生報「橋」副刊』を中心に——

丸　川　哲　史

前書き

台湾の現代史を語る上で，1945年から1949年にかけての時期というものが重大な位置を占めながら，国民党政権と台湾民衆との衝突による二．二八事件，あるいは白色テロにかかわる記憶のタブー化という現象に象徴されるように，その後の台湾人の記憶と自己意識，あるいはアイデンティティーにとっての一つのボトルネックとなっていることは，改めて言うまでもない事実である．それは，例えば，二．二八事件を主な題材として初めて制作された映画フィルム『悲情城市』(1989) が，当時の記憶をどう再構成するかという課題とともに，制作当時，つまり戒厳令の解除 (1987) という脱内戦化へ向けた政治的転回との関数として論じられる傾向とも相関するものである．さらに周知のように，戒厳令解除以降の90年代，この時期 (1945～1949年) の集団的な記憶の捉え返しの試みというものが，二．二八事件関連の書籍が続々と刊行されるなど，一種のブームとなっている諸現象も指摘できるだろう．

さて，この時期 (1945～1949年) にかかわる台湾文学を総括的に論じたものとして，日本では，まず岡崎郁子氏の「二．二八事件と文学」(『季刊中国研究』第24号) を挙げることが出来るだろう．岡崎氏の同論文の主題は，二．二八事件という歴史的事件のトラウマが，如何にこの時期，あるいはこれ以後の台湾の文学作品，作家のアイデンティティーに影響を及ぼしているかに関わった内容である．そして，そういった主題設定の枠において，同論文は，精密に個々の作品を論じており，この時期の台湾における文学的営為を論じたものとして多分に示唆に富むところがある．しかし，一方では，この時期の台湾における文学的営為の総体を，「二．二八事件の悲劇」といった文脈に特化し過ぎているのではないかとの印象も受ける．それは，たとえば「結びに代えて」の次ぎのような部分に表現されているように思われる．

「ゆえに光復後台湾へ渡ってきた大陸の人々の様子に，失望から憎悪へと心情が変化していくのは，期待が大きかった分だけその憎悪が激しく深いものであることを示している．そして自身のアイデンティティーのよるべを失い，孤児意識にさいなまれ続けるのである．」

疑問点を提出するとすれば，ここでいう「大陸の人々」とは，当然文脈上，外省人のことを指すわけであるが，一般的に外省人と言っても，老兵，官僚，教師，あるいは専門文学者など，多様な階層があったことは，想像に難くない．つまり，後から見た場合に，二．二八事件という政治的事件というもの自体が，こういった階層性を同一の外省人イメージへと収斂させて行く力として働いてしまったという見方が出来る．本稿では，こういった曖昧さを排するためにも，発話

行為の主体としては，文学者に限定して論じることにする．ここから，当時のいわゆる外省籍文学者と本省籍文学者との間でどのような疎隔が存在し，またどのように相互的に相手に対するイメージを形成させたのか，点検してみようと思うのである．

その際に気を付けなければならないことは，本省籍文学者にとっての「外省人」とはどんなものであったのか，あるいは本省籍文学者にとって「本省人」とはどんなものであったのか，現在の段階で流布されている既成のイメージに拘束されずに，またそのイメージ形成のプロセスに対して自覚的に振舞うことが必要である．つまり，両者の著作，あるいは論争の過程を通じて，相手に対するイメージ形成に目を向け，そこに分け入ることである．インド系文学者でイギリスにおいて教鞭を取っているポストコロニアル批評の理論家ホミ・バーバが，主に異なるエスニシティーにかかわる他者のステレオタイプ化について，そのステレオタイプを剥ぎ取るだけでは，その対象の真なる姿を把握し得ることにはならない，と述べていることは示唆的である．

> 「ステレオタイプは，それが，元々のリアリティーに対して偽の表象であるからということで，単純化されるものではない．・・・〈中略〉・・・ステレオタイプは，重層的かつ撞着的な信憑性を形づくって，差異の知識を与えるが，同時にそれを否認し，あるいは覆い隠してしまう．」[1]

このバーバの言説に依れば，他者同士は，むしろステレオタイプの形成を通じてこそ，その差異を把握し得るのだということになる．1945年8月15日の日本の降伏から1949年12月中華民国政府が正式に台北に移るまでの時期とは，実は，台湾（あるいは，台湾の文化界）と大陸が，どのような形ではあれ，政治・経済・文化的に直に繋がっており，まただからこそ，様々な差異や衝突が顕在化していた時期でもあったということである．本稿の目的は，この特に，台湾の光復初期の段階における文学的言説の中での，本省籍文学者と外省籍文学者の間で生じた他者認識，およびステレオタイプの形成のプロセスに注目し，その歴史的条件を探るものである．やや先取り的に言ってしまうと，この時期の台湾の，特に文化状況を論じる上で，二．二八事件の影響というものは，依然として大きな意味を持つことに変わりはないにしても，その直後においても，奇妙なことに比較的率直で自由な言論活動が続けられていたように見受けられるのである．

そういったことは，台湾文学研究者，林瑞明が『文学界』で再録した1947年から1949年まで発行されていた台湾新生報，副刊『橋』（1947／8／1～1949／4／12）の存在によっても明らかである．光復初期の出版状況を研究する何義麟によれば，台湾新生報は，日本統治時代から光復初期にかけて，紙面を一新しながら持続した新聞で[2]，また二．二八事件以後，日文欄を廃止したが，47年には，文芸欄の副刊として『文藝』（5／4～7／30）を十三期発行，また『橋』副刊を発行するなど，文芸方面にも力を注いでいた有力新聞である．この『橋』副刊に小説や評論を載せていた葉石涛は，この『橋』副刊について，「外省系作家と本省系作家が共同合作して，光復以後，意義ある「台湾文学」がどのような路線を歩むべきか最も熱烈に論争を展開した」ものと評価している（1986）[3]．主要執筆者としては，主筆の歌雷（本名:史習枚）とその周辺人物，孫達人，凌風，楊風などまだ学生籍を持つ者，そして，秦嗣人，天野，稚真，欧陽明，雷石喩，

陳大禹などの外省籍文学者がいる．彼らは，お互いに文学論争を展開し，それぞれ違った文学理念を提示していたようである[4]．また，本省籍作家としては，楊逵，呉濁流，呉坤煌，呉瀛涛，林曙光，呂訴上，張欧坤といった顔ぶれが目に付く．

重要なことは，この『橋』副刊が発行された時期は，二．二八事件以後でありながら，先の葉石涛の評価にもあるように，いくつか興味深い論争が展開されている点である（後に詳述する）．別の言い方をすれば，1950年6月に発布された戒厳令の施行から本格的に始まる権力による言論抑圧が全面化する少し手前のこの時期に何があったのか？という問いが，また本稿の書かれるモチーフの大きな部分を占めていることになる．本稿のテーマは，『橋』副刊に現われた論争の吟味を通じて，歴史的，文化的に別々の条件において生きていた文学者同士の間で，どのようにしてその同一性と差異が確認され，またどのように他者に関わるイメージが形成，交換されて行ったのかを探求するものである．　さらに，もう一つ付け加えなければならない先行研究としては，彭瑞金による「『橋』副刊始末」（『台湾史料研究』）呉三連基金会 no. 9　1997）が上げられる．彭氏の『橋』副刊全体に対する評価は，だいたい以下のような総括に収斂されている．

> 「もとより実践の可能性はなく，唯一決定したのは，中国作家の台湾作家に対する優位であり，それは，政権の力によるものであり，政権によりかかる作家が文学の主権と発言権を獲得したのである．これが『橋』によって形成された台湾文壇の現象であり，台湾文学の正常なチャンスを押し殺してしまった．」[5]

実際に，この時期の『橋』副刊における論争の力関係が，氏の指摘するような外部要因としての政治的コンテクストによって枠づけられていたことは，大いに予想されることであり，このこと自体に異論はない．しかし，文学論争におけるヘゲモニーが，当時の政権との利害と直接的に連動していたとは考え難いところもある．E・サイードが『オリエンタリズム』の中で，文化的な権力について「生（なま）の政治権力と直接の対応関係にはなく，むしろ多種多様な権力との不均衡な交換過程の中で生産され，またその過程のうちに存在する」と述べたように，文学論争は，やはり独自の諸言説，諸論争の磁場として考察される必要があるだろう[6]．要するに，文学における論争とは，また独特の文化的ヘゲモニーの枠組みを通じて形成されるものであると考えるべきであり，そういった文化的ヘゲモニーの内部における政治性として一度吟味してみる必要があるのではないかということである．また具体的に言っても，この『橋』副刊が突然の停刊を余儀なくされたのも（歌雷を始め，多くの外省籍作家が台湾から姿を消している），彭瑞金も指摘しているように，白色テロの先駆けともいえる1949年4月6日に台北師範学院の学生二百人余りが逮捕された所謂「四・六事件」の影響によるものである．つまり『橋』副刊を主催していた外省籍文学者が，当時の政権の利害とはまた別の論理で動いていた（むしろ当時の国民党政権にとっては，弾圧の対象となっていた）ことも，また実証的なレベルでも明白なのである[7]．

*

本稿が論じられる展望として，以下のような順番で論じられて行くことをあらかじめ提示して

おく．

（a）新文学運動の継承としての側面
（b）言語の切り替え，及び「方言」をめぐって
（c）台湾における脱植民地化の特色
（d）脱植民地化における「日本」，あるいは「女性」の表象

（a）新文学運動の継承としての側面

『橋』副刊の主幹を務めていた歌雷は，本名を史習枚と言って上海の復旦大学新聞系を卒業し，光復後最も早い時期に接収員として台湾にやって来た人物である[8]．彼の『橋』副刊の発行にあたっての「刊前序語」（1947／8／1）には，「橋は，新旧交代の象徴であり，見知らぬものから親密さへと到る橋の象徴であり，また新天地の象徴であり，また新しい世紀を象徴するものでもある」[9]と述べられている．この時期，大陸は，国共内戦の最中であったが，新文学運動を引き継ぐ意志を持っていた歌雷にとって，台湾とは，当時大陸では十分に展開することが不可能になった新文学運動を唯一展開し得る「新天地」として映っていたことは想像に難くない．さらに歌雷とともに『橋』副刊を終始リードし，「私たちの文学の任務とは，『五四』が未だ果たせていない任務である」[10]と述べている外省籍の評論家，雷石榆は，東京左連の結成にも立ち会った人物であり，回想記の『もう一度，春に生活できることを』からも分かるように，一貫して国民党政権に対して批判的な距離を取り続けていた人物である[11]．現に彼らの提唱していた「新写実主義」というスローガンを取り上げてみても，彼らの志向性は，五四新文化運動の流れで言えば，終始国民党に対して批判的に活動していた分子であることが察知し得る．

しかしもう一方で，また彼らの同志的な存在であった外省籍作家，欧陽明による「社会に深く分け入り，人民に近づき，呼吸をともにし，一つの声となり，民族解放革命の伝統を継承し，五四新文学運動が未だ極めていない主題――「民主と科学」を完成させなければならない」[12]といった，過剰に啓蒙的な姿勢にも突き当たることになる．彼らが「五四」の精神を継承しつつ，それを台湾にもたらそうとした意図は明白でありつつも，そのことによって尚更，彼らが，光復以前の大陸と台湾における新文学運動との影響関係について無知であったことも，また容易に推察できる[13]．彭瑞金も述べていたように，外省籍の文学者たちが，本省籍の文学者に対して，一方的に台湾を文学の不毛な場として表象してしまうような高圧的な姿勢を示していたこともまた事実なのである．本省籍の作家，毓文は，『橋』副刊に先立つ，『文芸』副刊において，以下のような不満の態度を示している．

「最近筆者が，新聞や雑誌の上でよく見かける文章があるが，彼らは，文芸界には活気がない，と見ているようで，このように断言している…「本省は，文芸の分野において処女地であり，また本省人の国語の程度もはなはだ低い」と．また「本省人は，文芸を愛することができない」と．またある人は，軽率にもこのような言っている…「文芸は，台湾には不用な

ものである」と．過去の業績を抹殺するこのような論について，筆者は賛同できない．」(1947／7／23) [14]

このような不満を表明した言辞は，専ら外省籍文学者によって「台湾新文学」が一方的に外部注入され，本省籍文学者がそれを一方的に学ぶ立場に立たれることを潔しとしなかったことの証左である．他の本省籍文学者にしても，例えば『橋』副刊紙上で，呉濁流は，「私個人として，過去台湾の新文学運動について多くの材料を持っており，今日それを元にして研究することが出来ると考えている…」[15] と述べ，楊逵も，「日本帝国主義統治下で，私たちは，新文学運動の歴史を有しており，多くの先輩が監獄に入り，そこで地獄の声を発し，また多くの先輩が，そのために地獄に行ってしまった」[16] と述べている．つまり，紛れもなく，これら呉濁流や楊逵の論述は，頼和などの光復前の台湾人作家を念頭において，光復前の台湾における新文学運動との繋がりというものを意図的に喚起させようとする狙いがあったと考えられる．この時期の本省籍作家において，特に楊逵こそ魯迅精神を台湾に復活させ，現代中国文学を広く台湾に広めようとしていたことは，この頃楊逵が雑誌『文化交流』を創刊し，『中国文芸叢書』のシリーズを編集した事実からも窺い知ることができるものである [17]．

しかし，ここでまた別の本省籍の評論家によって，興味深い論点が提出されていたことにも注意を向けてみる必要がある．それは，光復前における新文学運動，左翼思想が残した言説の枠組みを通して光復前の台湾社会のあり様を分析した葉石涛の評論，「1941年以後的台湾文学」である．この評論は，主に第一回大東亜文学賞を受賞した日本人作家庄司総一郎の作品『陳夫人』を論じたものである．この評論で興味深いのは，皇民化期と呼ばれるこの時期（1937年以降）について，南進基地として位置付けられた台湾のあり様，あるいは，動員の対象でもありまた動員する主体でもあった台湾人のあり様を正確に分析している点である．

「この時期，以前台南に住んでいた日本作家庄司総一の作品『陳夫人』が，台湾の総体を捉えていた．この作品は，台湾人と日本人女性の結婚を題材に取って，ヒューマニスティックな眼差しで台湾の封建社会を透視したものである．作者は，鋭い観点をもって，心理の機微に通じた筆法で，台湾資産階級の成立と発展を描き出し，多面的に台湾人の生活を浮き彫りにした．この作品の中心は，台湾知識階級の思想的変化に向けて設定されている．しかし，私たちは，作者の動機や作品の政治性を見逃してはならない．彼は，優越民族に固有の観念によって，作品の雰囲気，作品中の夢や詩をコントロールしている．これは，疑いなく，日本人の異国情緒から出てきたものである．さらに，作品の歩みは，「皇民化」運動に一致しており，ここから分かるのは，日本の作家は，台湾を中継地として把握していたということである．何故なら，彼らは，常々軍部によって南方戦線に派遣され，帰途において台湾で休息をとることが出来るからである．」[18]

ここに出ている「資産階級」「知識階級」「封建社会」「優越民族」「中継地」etc――こういったタームによる分析は，左翼思想の正当性が，ある意味では日本軍国主義の敗北によって保証さ

れ，光復後の一時期に復活していたことの証左であるかもしれない．しかし，葉石涛自身の回想によれば，むしろ光復後の 1945 年から 1949 年までの間に受けた影響の方が強いとも述べられている[19]．現在は，土着志向（台湾志向）が強い葉石涛でさえも，光復後四年間という，多少とも「五四」的なものが神話化されていた時期にあって，その影響下でものを書いていたということである．ここから言えることは，実に『橋』副刊における諸言説，諸論争は，新文学運動，あるいは左翼的言語を共通の基盤として成立していたものであり，それは，1950 年代以降の反共文学，戦闘文学などにモードが移って行く直前の，新文学運動の最後の共同戦線とでもいえる言論空間を束の間，形作っていたということである．そして，この点から，彭瑞金の「『橋』副刊始末」にあるような「台湾文学の正常なチャンスを押し殺してしまった」ものとする『橋』にかかわる評価への若干の違和感が感じられるのである（ここにおける「正常なチャンス」が何を基準としているのかは，曖昧なままであるが）．「台湾文学の正常なチャンスを押し殺してしまった」と言うのであれば，その原因は，むしろ議論が行われるための十分な時間が断ち切られたこと，つまり『橋』副刊を停刊にしてしまった国共内戦（国民党による反共の徹底化）の影響といった，外部的な要因によるものだと言った方が良いだろう．もっとも，『橋』副刊における論争自体が，主に本省籍の作家と外省籍の作家との間での疎隔を作り出していたこと，またその諸論争が必ずしもかみ合ったもので無かったこともまた事実であり，この内部的要因の方は，現在も未だ解決されていない問題だと言ってよいだろう．

（b）言語の切り替え，及び「方言」をめぐって

光復以後，台湾における公用語は，日本語から国語（標準中国語）に転換されたわけであるが，実際，台湾における文学界においても，概ねのところでは，文学作品の言語を国語へと切り替えて行くこと自体は，大枠として是認されていたように見受けられる．しかし例えば，呉濁流は，1946 年の時点で，雑誌『新新』に，以下のような異議申し立てを述べている．

> 「武装の解除された日文は，文化の紹介を努める役割として大切なものである．殊に世界各国の文化が殆ど日文によって紹介されている．日文ひとつ解すれば，各国の文化に接することが出来る．・・・〈中略〉…私の考えでは，政府の機関紙の日文は，当然廃止すべきであるが，その代わり日文新聞や日文雑誌は，過渡期と言わず永遠に自由に発行を許すべきである．」（1946／10／17）[21]

この記事の日付から鑑みて，このような意見は，実際に当局に対して言語政策の転換を促すという意味合いよりも，この言語の切り替えによって本人も含めた多くの本省籍作家の危機感を表明したものとして受け止められる．つまり，言語政策の転換については，それを当然視するものの，そこに持っていくためには現実的な方策として，いわばクッションとしての日本語の使用の存続を求めていたのだと言えよう．この時期の言語政策の転換についての呉濁流の考えは，基本的に後に書かれたエッセイ『夜明け前の台湾』にも出てきており，興味深い[22]．

また，こういった危機感は，多くの本省籍作家によって共通して抱かれていた問題であり，それは，1948年の時点で『橋』副刊に載せられた本省籍作家，朱実による評論にも示されている．

「日本語廃止の命令は，台湾の文壇に打撃を与えた．私たちは，日本語に今更，後ろ髪を引かれるわけではないが，私たちは，過去50年間の台湾の異民族下における統治を忘れることができないのである．だから，この過渡期においても，本省の青年が文学において日本語を使うのは，やむを得ないことである．私たちは，国語を獲得するまで，沈黙を守っていなければならないのか？文学を論ずる権利がないのか？と問いたくなる．」[23]

しかし，本省籍作家から出された言語の切り替えにかかわる評論は，上記のような公憤を基調としたものばかりではない．例えば，『橋』副刊紙上において，別に楊逵が行った「文芸工作者の団体が成立した後，各新聞副刊編集者が協力して，翻訳者を探し，日本語で書かれた作品を翻訳して掲載すること」[24]（1948／3）といった提案には，より積極的に折衷策を提示しようとする努力が窺えるものであり，また実際『橋』副刊紙上において，葉石涛の「三月的媽祖」など，多くの日文作家の作品が訳出し，載せられている[25]．こういった楊逵の立場の取り方は，下村作次郎が『文学で読む台湾』の中で指摘しているように，光復前1937年の総督府による雑誌・新聞等の漢文欄廃止の処置にかかわっても興味深い対応を見せている[26]．同年楊逵の編集していた『台湾新文学』（6・7月号）の編集後記において，楊逵は，「併し，漢文作家諸君と雖どもこれで退却するには當らないと思ふ．今迄通りに御寄稿下されば，我々の手で適當な訳者を見つけて翻訳の上発表するから一艘の精進を願いたい」と述べている．漢文廃止によって書けなくなる文学者への配慮を怠らない楊逵の態度は，十一年後には，言語的には全く逆の廃止の圧力の最中ででも発揮されていたことになる．

日本語を廃止して行くことは脱植民地化の過程として，他に日本によって植民地にされた朝鮮半島と同様に，概ね必要な措置として承認されるものであっただろう．しかし，日本語を始めとする植民地時代に移植された文化要素に対してどのように区切りをつけて行くかということについては，かなりの温度差があったと言えよう．また，本省籍文学者の中でも，中国語に乗り換えるために精進を始めた者，呉濁流のように異議を唱えた者，楊逵のように翻訳に活路を見出そうとした者，また当然，筆を折ってしまった者もいたはずである．当時の日文作家を見た場合に，例えば『橋』副刊などにもかろうじて，呉濁流や龍瑛宗が書いた短文も見受けられるわけであるが，例えば光復前の日文作家であった張文環，王昶雄，巫永福などは，光復以降ほとんど文学的営為から身を引き，それぞれ政府職員や会社員，教師などになってしまっている．こういった書くことを断念した多くの文学者の存在を想像の中で補いながら，論を進める必要もあるだろう．そして，それは総じて植民地統治下にあった台湾人作家特有の苦悩だったわけであり，専ら植民地の記憶ではなく抗日戦争を経験して来た文学者にとっては，想像することの難しい境地であったと言えるかもしれない．

*

全体の流れとして，文学創作の言語が国語へと切り替わって行くことは，当局としては既に決

定事項として進められており，この後，『橋』における創作言語にかかわる争点は，別のところへとシフトして行った印象を受ける．それは，国語の普及が前提となりながらも，国語（白話文）による作品を享受出来る者が少なかった段階において，圧倒的に多くの民衆が台湾語を解する当時の現実から出発しようとしたものである．つまり，1930年代に展開された台湾における郷土文学論争（あるいは，台湾話文運動）の反復にも似た印象を受ける「方言」の導入にかかわる論争が，1948年前後，『橋』副刊紙上においても展開されているのである．ただし，『橋』副刊における「方言」の導入にかかわる論争と1930年代の郷土文学論争が違う点として，この時点では，既に仮想敵としての日本語への対抗という文脈が重要ではなくなっている点がある．

『橋』副刊において展開された「方言」の導入にかかわる論争には，またどのような問題が背景としてあったのか．実は，この「方言」の導入にかかわる論争は，1930年代的な課題，つまり，国語（中国白話文）を十分に使える作家や，それを享受する民衆が欠けているという構造的な問題の上に，さらにそこに脱植民地化（中国化）の問題が微妙に重なり合っているように見受けられる．例えば，本省籍作家，林曙光は，台湾における言語状況の史的前提について，「当初より台湾文学は，日本語を使用していたわけではなく，また中国語の古文を使用していたわけではなく，祖国の白話文学運動の刺激を受け，台湾においても文学革命がもたらされ，白話文は，一時期非常に流行した．しかし，この種の白話文は，いくばくか方言を含まざるを得ず，だからそれは，閩南白話と国語とが自然に合わさったようなものになっている」[27]との分析を提示している．当時，外省籍文学者においては，やはり文化的側面における脱植民地化の課題とは，中国化であり，また文化の面では国語の普及と同義に考えられていた節が強く，林が述べた「閩南白話と国語とが自然に合わさった」ような状況は，端的に国語の普及によって克服される対象として考えられていたわけである．このような比較的に単純な発想というものは，大枠として，国語を頂点として「方言」を周縁化する発想に貫かれており，国語を習得することがより真性な中国人に近づくための手形として考えられていたことは，想像に難くない．例えば，外省籍作家，楊風は，「方言」擁護に関わる言説に対して，以下のように反駁している．

> 「台湾語を使用した所謂「方言による文芸」には，決して同意しない．何故なら，第一に，言語の統一の進展が阻まれる．第二に，台湾語は，蘇浙などの「土語」とは違い，本来的に語彙が不足しており，仮に新たに作りなおしたとしても，さらに捩れ，捻くれてしまうのは必至である」[28]と述べている．

ここにある「蘇浙などの「土語」とは違い，本来的に語彙が不足しており」など，さほどの根拠が感じられない一元的な発想ではある．しかし当時としては，国語の普及が脱植民地化の課題の一部としても優先されなければならなかった時代的要請があり，また国語普及の方途をめぐるヘゲモニー関係においても，「方言」の導入を許そうとしなかった傾向が厳として存在していたということである．

しかし，もう一方で，林曙光が指摘したように，民衆の中で国語の浸透が進んでいない段階での国語普及一辺倒以外の方途についてなされた提言が，1930年代の蔡培火によって台湾語（ロー

マ字表記)の普及が企図された文脈とも通じているように，この時期に出てきているのは興味深い.本省籍文学者,宋承浩は,「発展本島方言文学的文字問題」において，近代中国における国語運動の出発点にあった「漢字の廃止」というテーマを素朴な形ではあれ,再提出しているのである.

「本島における方言文学の展開が企図されている中で，漢字を揚棄しローマ字を採用する方法が，多くの人々の注目を集めている．…〈中略〉…近代科学が発展してより，中国封建社会の激烈なる工業社会への変化の時間において，中国象形文字のマイナス点が暴露された．中国の文字は，本来の象形性によって，だいたいにおいて一つ一つの字が独立した記号となっているために，記憶する上で重大な負担になっており，また同時に外来語を吸収する上での困難も極めて明確となっている.」[29]

こういった発想など，むしろ本省籍文学者から，五四以来の理想主義的な言語観（漢字の廃止，表音文字化）の一つのモメントが繰り返されたものであり，興味深い．ここからも，国語の普及を近代中国の再建の優先課題として考える外省籍文学者と,当時の台湾の言語状況から出発しようとする本省籍文学者との言語観の違いというものがクローズアップされることになる．しかし,『橋』副刊において大枠としては，国語を主たる創作言語としながら，その中に台湾的な特色を盛り込んで行くとする現実的折衷的な選択というものがメインストリームを築いていたようにも思われる．このような態度は，例えば林曙光の評論「文学与方言」の中にも窺えるものである．林曙光は，台湾の言語要素というものを文学創作（白話文）の中にもたらすのであれば，そこに一定の基準を設けるべきであるとして，以下のような提言を行っている.

「特に台湾方言を運用する際には，以下のような問題を考慮せざるを得ないだろう.
一，使用の範囲は，具体的特殊的なものに限られるべきである.
A，固有名詞
B，国語の中にはないもの
C，精彩を加えるもの
D，地方の特性をよりよく表現するもの
E，国語では，比較的表現し難いもの
二，使用する際の態度は，どのようでなければならないか.
A，字義に間違いがないか，慎重に考慮すべきである
B，濫用を避け，できるだけ少なくする
C，文芸が通俗化するのはかまわないが，通俗的なものそのものは，文芸とは言えない.」[30]

以上のような宋承浩，あるいは林曙光の論述を，例えば外省籍作家，楊風による「新時代新課題」の中の「第一に，言語の統一の進展が阻まれる…」といった論旨と付き合せて考えてみた場合に，ここでも創作言語の問題は，大陸における新文学運動の延長にあった「大衆語論争」(1930年代）を脱植民地化のレベルで繰り返しているように見受けられる．つまり，1930年代において瞿秋白などが展開した「大衆語論争」に見られるような，現に民衆が使っている言語による創

作という理想も，近代国家の再建に必要な言語の統一という前提の中にあったわけである．そしてまた，この言語の統一という課題というものも，実は，当時の台湾が脱植民地化して行くための手段でもあり，また目的でもあったものだとも言えるものである．ただし，この脱植民地化のための言語統一という課題に対して，どのような主体によって，どのような方途によって担われるのか，そのことが「方言」の導入をめぐるヘゲモニーの問題として浮上していたと言えるだろう．

（c）台湾における脱植民地化の特色

二．二八事件の遠因を探って行く際に，省籍矛盾というものがクローズアップされる場合と，国民党による独裁的体質，及び経済政策における失敗などに帰する場合など，現在も進行形で様々な議論が展開されている．ここで，『橋』副刊における様々な論争の低音部として流れている，文化的側面における脱植民地化の特色を一つ挙げることが出来る．それを，例えば，丸ごと植民地化されていた朝鮮半島との対比として言うならば脱植民地化において主体的にそれをリードしたのが，当の植民地の経験を持つ人々ではなく，主に大陸における抗日戦争の経験の持つ人々であったという側面を指摘し得るだろう．しかし，問題は，そういった記憶や経験の差異というものが脱植民地化という課題にぶつかった場合に，そこから何がどのように問題化されて行ったのか追跡することが肝要である．台湾における脱植民地化の一つの課題として，それは，台湾の中国化であるとともに，植民地時代の日本的要素というものの台湾からの排除が，誰によって，どのように進められるのかということでもあった．それは，素朴に考えてみて，日本的要素が存在する台湾人の中から日本的要素を「脱植民地化」するとは，その当の台湾人の身体感覚においてどう感じられたのかという問題があるだろう（単に身体を手術して腫瘍を取り除くようなものであったのかどうか）．さらにまた，その台湾人の中の日本的要素を「脱植民地化」する主体が自分ではなく，その必要のない者によって為されるのであるとすれば，それは台湾人（当時の本省人）にとってどのように感じられていたのか．こういった台湾人文学者にとっての脱植民地化にかかわる自己意識の錯綜は，既に 1946 年の段階で明らかになりつつあったようである．当時，中国語日本語半々で発行されていた雑誌『新新』における「談台湾文化的前途」（蘇新・王白淵その他）において，早くも台湾（本省人）の中の日本的要素への執着というものが議論の俎上に載せられていた．

> 王：「日本統治下にあって，過去の台湾が何うにか文化的に国際水準に近づいたことは良いことだ．中国にはなお一部のゲーテ全集，ダンテ全集や，シェークスピア全集もないのに反し，台湾のわれわれは世界の古典を一応はかじっている．これは台湾文化の優点である．」
> 蘇：「台湾における在来文化と新文化（中国文化）の相違は，社会の発展段階における相違によるものである．」[31]

ここでの王白淵の発言と蘇新の発言には，日本的要素を如何に「脱植民地化」するかというア

ポリアが既に刻まれている．王の発言には，中国よりもより世界化している場としての台湾が想定されており，それは，先験的に日本による植民地化の産物としてあることが言い切られている．これに対して，蘇新は，マルクス主義的な認識の枠組みを通じて王の議論を相対化しようとしているようである．

では，こういった台湾の脱植民化における日本的要素についてのアポリアが，二．二八事件を経た1947年～1949年の『橋』副刊には，どのような形で持ち越されてきているのか観察してみよう．1947年の11月段階において，既に『橋』副刊紙上で，外省籍作家，欧陽明によって，台湾の独立傾向に対して牽制する論調が現われている（ちなみに，同年7月9日に，真偽の程は未だに詳らかではないが，許丙，簡朗山，辜振甫，林熊祥，徐坤泉などの5名が，元日本軍将校とともに「台湾独立」を画策したとして審判を受けている[32]）．

「台湾文学の建設において，台湾が光復し，祖国の国土に返り，台湾同胞が解放され，祖国の懐に帰ったこと，このことは，事実が証明している．現在，台湾は，既に中国の一部であり，だから，台湾の各方面の建設について，もちろん軍事，国防，政治，経済，文化，教育なども新中国建設の一部であり，どんな理由や粉飾を施そうとも，片方を分離してはならないのである」[38]

一介の新聞の文芸欄とはいえ，当時の文学的言説というものが，いかに現在に至るまでの政治的なイデオロギーに力を貸し与え神話化させてしまっていたか，その特色がよく窺えるものである．しかし，こういった今日まで続く省籍矛盾の先駆けともいえるティピカルな文化的言説に対して，例えば，楊逵などは，大陸中国と台湾とが，新文学運動という共通の利害のもとにあることを強調しつつ，省籍による疎隔を解消するための呼びかけを行っている．

「私は，心から祖国を愛し，人民を愛する文学工作者に呼びかける――省内外の疎隔を廃し，共に中国新文学の一環としての台湾新文学建設に向おう．」（1948／3／29）[34]

さらに別の本省籍作家の方からも，省籍間の疎隔についての本省人の立場を弁明的に述べている論調も，この直後に現われて来る．朱実は，まさに懸案的要素となっている日本的要素について「本省作者的努力与希望」（1948／4／23）の中で以下のように述べている．

「私たちは，過去の日本帝国主義の植民地政策に対して，実に大きな痛手を味わったわけだが，しかし，侵略者は既に自から水に溺れてしまった．日本は，過去半世紀の間に無論，産業，交通，衛生，建築技術などで相当の成功をもたらしたが，このことを否認することは出来ない．しかしだからといって，私たちが日本の残した文化を分析するのは，決して帝国主義へのノスタルジーから来るものではない．」[35]

しかし，興味深いのは，同論文の中で朱実は，また別方向から，つまり日本的要素に媒介されていない台湾，想像された共同体としての郷土台湾を根拠付けようとしている点である．

「台湾特有の文化の発揚，つまり台湾の風習，歌謡，高山族の生活，これらは，所謂郷土的色彩を持つものである．私は，郷土的色彩を持った作品が多く出てくることを希望する．」[36]

こういった方向は，現在の段階からは，1970年代の郷土文学論争の先駆け的な問題設定としても感じられるものであるが，しかし，全体の流れとしては，やはり台湾における日本の影を一方的に排除するというテーマ設定，あるいは台湾の独自性に対する抑圧というテーマ設定の方が，場を支配していたように見受けられる．外省籍作家，呉阿文の言説は，その最たるものである．

「日帝統治下の台湾の51年間に，思想の上で私たちにもたらされたのは，この二つの文化の混ざったものが，「原始的娼婦文化」である．この寄生的で，後進的で，腐敗した「原始的娼婦文化」こそ，台湾新文学の仇敵である．…台湾が進歩するための文芸工作とは，つまり団結して，共同して，この「原始的娼婦文化」を取り除くことである．…このような台湾特殊性の濃厚な「原始的娼婦文化」は，台湾の思想方面の様態として出てきている．例として具体的な証拠を挙げると，つまり「台湾独立」であり，また「託管＊」などの正しくない思想である」（＊国連による信託統治）[37]

ここに見受けられる「原始的娼婦文化」といった粗雑なタームのジェンダー的側面に関する考察については，後に譲ることにする．ここでまず興味深いのは，「資本帝国主義植民地封建文化」において日本の植民地統治が批判されていること．そして，その次ぎの「台湾が光復した後，このような文化の上にさらに「官僚的」「買弁的」な半奴隷文化が加わった」と述べられている部分である．この部分は，単純に光復後の統治主体のあり方への批判と考えて良いだろう．つまり，まず日本統治を批判する者として「反帝（反植民地）」の立場に立つことが表明され，その次には，さらに国民党に対しても批判的な勢力として「反封建」の立場に立つものであることが表明されているのである．

しかし，何れにせよ「原始的娼婦文化」という物言いが，「台湾独立」，「託管」に結び付けられる言説の様態を見た場合に，ここから二重の契機が浮かび上がることになる．要するに，筆者の呉阿文の言説は，結果として台湾における日本的要素と国民党統治の失敗という二つの別々な契機を一つのもの（「原始的娼婦文化」＝「台湾特殊性」）に結び付けてしまっている．つまり，呉阿文の言説は，明らかに台湾を脱植民地化させる主体として振舞っているわけであるが，結果として彼の言説の向きは，台湾から排除されようとする日本的要素（植民地）と国民党統治による害悪（封建）を「台湾特殊性」へと一般化させてしまう効果を産み出しかねないのである（この言説の効果は，またそういった傾向に無自覚であった者についても，むしろそちらの方向に追い込んで行ったのではないかとも推測できる）．

ここから分かるのは，「反封建」というスローガンが有していた意味のズレが，その光復以前の経験の質の違いとして露呈しているのではないかということである．つまり，新文学運動の光復前後を通じた一貫性として捉えようとする本省籍文学者にとっての「反封建」の意味と，主に

抗日戦争を戦い，次いで国共の対立が念頭に置かれた外籍籍文学者にとっての「反封建」の意味は，かなり違ったものだったのではないかということである．

（d）脱植民地化における「日本」，あるいは「女性」の表象

ここまでの『橋』副刊の主要な諸言説，諸論争は，新文学運動，あるいは五四精神という共通の土台において展開されつつ，その中での大きな分岐として光復（1945年）までのそれぞれの記憶や経験の違いというものが少なからず潜在していたと言える．つまり，植民地化された経験というものと，抗日戦争を戦った経験の差というものが，前節で触れたように，台湾における光復以前の日本統治時代の遺産をどのように扱うのかという，ポスト植民地的な課題を争点として浮かび上がったということである．ここで分析されるべきことの一つとして，現に政治的権力としては台湾からは消えつつ徐々に不可視のものとなって行く「日本」が，いわば過去の台湾との連続性を表象する際に付きまとって来る「影」，あるいは抽象的な記号として機能していた様態がある．しかし，考えてみれば，植民地の記憶にせよ，抗日戦争の記憶にせよ，いずれもが，この「日本」を加害者として表象し，こちら側を被害者として表象することは可能だったわけである．さらにここで，この時の被害者としての立場をより強烈にアピールする手段として，「日本」という敵に対して立てられたものとして「女性」の表象というものが，諸言説，諸論争の中で賭金的なポジションを得ていたことを確認する必要がある．それは，例えば1933～1935年まで留日の経験があり，後に抗日戦争を経験している文学者，雷石榆[38]の論述において，以下のような脱植民地化にかかわる述懐となって結晶している．

> 「抗日戦争二年目の時，…一人の逃げ遅れた婦人が輪姦され，また一人の老人が殺されていた．また，捕虜の日記や書類から，さらに残忍な焼殺行為があったことも知った．日本が従軍慰安婦を有していることは，世界でも例の少ないことである．第一戦区にいた頃，私は，日本軍によって徴用され従軍慰安婦にされた三人の朝鮮の女性を自ら審問したことがある．…〈中略〉…
> 無論どの民族も歴史性のある伝統を持っているが，それ自身の発展の条件，及び外側との関係によって変化もする．例えば，中国は，東晋以後，異民族と通婚しただけでなく，音楽，絵画，彫刻（特にインド仏教からの影響），あるいは観念論哲学（唐宋時代に仏教，道教が特に流行）の影響を受け，二十世紀に至って，欧米現代文明の影響を受けた．台湾の同胞は，日本が侵入する以前には，純粋な中国の伝統の中にあったということが言えるだろう．しかし，五十一年間の植民地統治を経て，固有の文化は削り取られ，日本の文化や教育（倫理意識を含む）が強制され，それに取って換えられてしまった」[39]

単にこの文章は，抗日戦争の記憶に触発された個人的な文章にすぎない，という言い方も可能である．しかし，一つ言えることは，抗日戦争における被害の形象は，特に戦争における輪姦と「従軍慰安婦」という「女性」にかかわる表象によって際立たせられており（その指摘は，全く正

当であるものの），その被害のイメージは，後半の部分の台湾における植民地支配の内容へと接続されているところに，ある種の飛躍が見て取れる．そしてこの時，日本によって「削り取られ」てしまった台湾にあった「純粋な中国の伝統」とは，前半の被害者としての「女性」の表象の延長線上にあって，勢い「女性」的なものとして読み込まれ，そこから「抗日戦争＝植民地支配」という等式が印象づけられてしまう．ここで重要なことは，この等式を成立させるための媒介となっているのがジェンダー的な要素であるということ，そして，そのナショナリティーの組み立てにかかわるジェンダー的センスは，例えば，前節における呉阿文の「原始的娼婦文化」といったタームとも相関するように思われるのである．

では，ここに出てくる「女性」の表象が，ジェンダー化された場としての台湾に写しかえられた場合に，一体どのようなことになったのか．『橋』副刊の中でも論争中の論争とも考えられる，雷石榆と彭敏との間で計五回にわたって交わされた「日本統治」と台湾との関係をめぐる論争の特色は，まさに「女性」の表象というものが，台湾という場を如何に想像するかという無意識的な欲望の賭金として使われていたという意味で，植民地期（及びポスト植民地期）における政治的想像力の空間における重要なテーマを形作っており，興味深い論点を浮かび上がらせている．

まず，両者の論争の問題設定として説明しなければならないのは，1948年の4月から5月にかけて，いわば三面記事のニュースとして台湾島内を騒がせていた事件が前提となっていることである．それは，陳彩雪という若い女性とその母が，名士である元夫，王明毅に雇われた法律顧問，周儀長によって脅迫的に離縁を迫られたという事件である――このことを念頭においていただきたい．雷石榆は，この事件を導入部に据えて，台湾の社会体質を日本による植民地時代に遡って分析・批判している．

> 「日本統治時代を過ごした弁護士，現在の王氏の法律顧問を兼ねている周儀長が陳彩雪を脅すときの語気は，今だに植民地のある種の買弁的性格を十分に表現している．「金の問題だろう．幾らほしいんだ．二万元で十分だろう？」金銭以外，全く道徳観念や責任感がないのである．…台湾の女性は，実に可哀相である．彼女らを解放し，日本帝国主義，特にその植民地的な女性への虐待意識を消滅させ，一方では，彼女らの知識と技術の水準を引き上げること，また生活上での独立が求められている．特別に女性自身が奮闘し意志を強くすることが求められている．不幸な境遇に到っても，単純に金銭によって解決を求めてはいけない．…しかし，ボヴァリー夫人エマは，淫靡な物質生活によって誘惑され，プレイボーイ，ルーブランシュ氏の贋の愛情によって騙され，最後には，悲劇的な終わり方をしてしまう．」[40]

この評論の問題点は，①「彼女らを解放し，日本帝国主義，特にその植民地的な女性への虐待意識を消滅させ」と，②「一方では，彼女らの知識と技術の水準を引き上げること，また生活上での独立が求められている」という，①の文と②の文との関わり合いである．つまり，②は，「反封建」という思想によって，特に五四に限定されずとも概ね是認される問題設定を代表していると言えるだろうが，問題は，①である．この①「彼女らを解放し，日本帝国主義，特にその植民地的な女性への虐待意識を消滅させ」ようとすることの正当性を真っ向から否認することも出来

ないが，さりとてこの①を論証するには，材料が足りない印象も受けてしまうのである．いずれにせよ，ここから類推されるのは，以前に雷が書いていた抗日戦争時の「女性」の表象――輪姦，「従軍慰安婦」等々の可視化された「虐待される女性」のイメージが，言わば植民地以後の台湾の「女性」にスライドされている点なのである．

こういった議論に対して本省籍作家，彭敏は，以下のような反論を展開している．

「過去の日本統治の歴史は，確かに台湾社会を理解する上での重要な鍵にはなるだろうが，万能薬ではない．もし，「日本の影響」と同類の論法が盲目的に濫用されるならば，それは，結果として笑われることになるだろう．このような断定は，現実への正しい理解を妨げるばかりか，空虚で近視眼的な作品を産み出してしまうだろう．…

(一)「私たちがいつも新聞で読んでいる」「男性がいかに女性を蹂躙しているかというニュース」について，まさに氏が語っていることは，光復以後，特に増えている現象であるが，まして，国内の新聞紙上においても，「いつも」「レイプ」や「レイプ殺人」などのさらに凶悪なニュースを聞くようになっている．だから陳彩雪事件とそれにかかわる言説は，「日本が残した毒」というよりも，現在の中国一般社会の傾向と一致するものではないか．

(二) 雷氏は，「植民地における女性虐待の意識」と指摘しているが，私たちは，氏が結局のところどのような意識を指して言っているのか，はっきりとしないのである．私たちは，日常生活の中で，容易に「封建的」な女性を見出すことが出来るけれども，虐待の意識と「植民地」との間には，どんな特別の関係も見出されない．

(三) 雷氏が日本の男性について論じた時，娼婦を買うことと妾を持つことを混在させているが，中国人を論じている時は，それを分けており，一方で「日本の男性にとって，娼婦を買うことと妾を持つことは同じこと」は，事実であると論じている．しかし，彼ら（日本人）も妾を持つときには，また「公然の責任」を追うのであり，中国人と異なるところはない．また，中国人も妾を持つ時以外に，また自由に娼婦を買うことが可能なこと，これもまた日本の男性と変わるところはない．雷氏の比較法は，大体において，科学的な正確さに欠けている．例えば「日本の職業婦人は，特別に美貌を持つ少女に限られている」（雷）など，事実に反している．このような部分は，「女人」の主要な論点ではないけれど，一部の人々の本省社会に対して持たれている偏見を典型的に表現している．…皮相で不正確な断定を避け，「台湾文学」を井戸の中のかわずのような狭い文学にしないために，「台湾新文学」は，より深い探索と科学的な分析の基礎の上に打ち建てられなければならない．」[41]

ここで興味深いのは，「より深い探索と科学的な分析」などの言葉に特徴的であるように，本省籍文学者，彭敏によって五四的な言説がかなり自分流に活用されている点である．ここでのテーマは，「女性」への抑圧をめぐっているわけであるが，彭敏による五四理解は，この「反封建」というモメントが「中国一般社会の傾向」に求められている点で，反帝（日本的要素）を強調する雷とは，決定的にズレてしまっている．

さらに光復以前からの売買春の問題を論じるにしても，そこには，かなり複雑な側面が存在す

ることも確かである．台湾の女性史家，廖秀真の論文「日本植民地統治下の台湾における公娼制度と娼妓に関する諸現象」[42] によれば，確かに，公娼制度を台湾にもたらしたのは，日本の植民地行政であったが，それ以前からいわゆる私的な売買春は，台湾においてもかなり盛んに行われていたようである．このことは，日本統治以前から連続していた台湾の移民社会的側面によるもので，元々からの男女比率における圧倒的な男性の過剰さからも来ているものである．しかし，明らかなことは，「日本で廃娼運動が盛んに行われていた時にも，その植民地台湾では言論の枠にとどまるのみであった」[43] とあるように，日本の植民地権力は，植民地経営において売買春を必要なものと考え，公娼制度を維持し，さらに大量の日本人，及び朝鮮人女性娼妓を台湾に送りこんでいたことである（また，当時の台湾人で民族解放運動を担った部分も，こういった問題を真剣に取り上げるには至らなかったようである[44]）．

雷の評論における問題点は，売買春文化の由来を日本統治という植民地の性格に求め，それを女性の解放を求める反封建的な課題として台湾社会を批判の対象としていることになっている．しかし，一方で中国社会において売買春が文化として無かったものとは，もはや誰も信じていないものである．ここで雷自身の批判の宛先を考えると，例えば，彼の「彼女らを解放し，日本帝国主義，特にその植民地的な女性への虐待意識を消滅させ，一方では，彼女らの知識と技術の水準を引き上げること」を要求している相手は，彼自身の来台のモチベーションから言っても，国民党政権に対してでもあったと考えられる．しかしこの評論は，結果として，単純に日本的要素というものを設定して，その残存の度合いによって台湾社会の封建性を評価してしまっており，つまり植民地性と封建性の混同に基づいたものとして受け取られるだろう．

別に，この部分の論争に言及した先行研究として，游勝冠の『台湾文学本土論的興起与発展』(1996) が挙げられる．この中で游は，雷の言説に対して「このような理路が錯乱した論述は，まさに中国正統の意識の影響を受けたもので，正確に台湾の現実を認識したものではなかった．部分的な大陸作家は，台湾の特殊性を軽視する意識によって台湾新文学運動の再建に参加し，相互的な尊重に欠けたまま合作の基礎を作った結果，両岸の作家による協力ということが空虚なスローガンになってしまい，このような台湾文学の方向にかかわる討論は，このために数々の衝突を引き起こすことになった」と述べている．以上のような印象について特に異論はないが，いわばここでの「中国正統の意識」なるものとは，「反封建」の意味内容を分節化せず，無意識化するところから出て来てしまった観念だったことを強調したい．

筆者は，さらに論争し合った両者が対立しながら，しかも台湾という場にかかわる評価の作り方については，共通した感心の寄せ方――植民地の表象としての「女性」，あるいは封建的劣位の表象としての「女性」――を持っていた側面を強調したい．この両者の論争において最大の特徴となるのは，近代的一夫一婦を標準と考えた場合に，娼婦あるいは妾という特異な「女性」の存在を媒介として，ある社会の質，あるいはある民族の質を推し量っている点である．ここには，当時の男性文学者が知り得た社会階層の中でも劣位にありかつ憐憫の対象を，特定のまとまりをもった社会や民族に対して投影するという心理操作が施されている点である．つまり，受動的立場としての「女性」，あるいは価値を貶められ卑しめられた「女性」の表象をある特定の社

会や民族へと投影する男性的な言説のシステムそのものが，その立場の相違と無関係に，最も植民地的なもの（主に文化的な概念としての「植民地」）ではなかったかと言うことである．

ここには，まさに典型的な植民地言説（あるいはポスト植民地的言説）のあり様が見て取れる．つまり，支配者男性（宗主国男性）と被支配者男性（ネイティヴ男性）が，係争の的となっている土地を「女性」と見たてながらお互いに覇を競い合うという，文化的想像空間のあり様である[45]．ここでは，この支配者男性（宗主国男性）と被支配者男性（ネイティヴ男性）をそれぞれ外省籍文学者と本省籍文学者における台湾と「女性」の問題として考えることが出来るかもしれない．しかし，それは，どちらがどれだけ「女性」を差別していたかという議論ではない．ここでは，二つのレベルで物事を整理する必要があるだろう．つまり，一つは，後々省籍矛盾と言われるエスニシティーの問題というものは，それぞれの歴史的経験の差異から出て来ているということ．そして，もう一つは，そのエスニシティーの差異を駆動している文化的装置としての「女性」利用への批判であるが，それは，取りあえずエスニシティーの種別性とは別のレベルに属する機制として考える必要があるということである．要するに，こういった別々の歴史や経験を持つ者同士の文化的な想像空間の中で，一体何が行われていたのか分析することなしに，本質主義的に措定された「台湾の特殊性」，あるいは「大陸中国の正統性」などいった対（つい）を為した命名の体系，またそれ自体が持つイデオロギー性を解除することは出来ないということである．

結びに代えて

台湾ニューシネマの頂点をなすフィルムとして多くの人々（内外を問わず）に鑑賞された『悲情城市』は，まさにこの時期における文学者の様子を活写しようとした作品であるが，奇妙なことに，二．二八事件とその後の山地をベースにした反政府闘争との時期が短絡されてしまっていることが指摘されている[46]．両者の間には，少なくとも二年間の間隔があると見られる（後者のモデルとなるのは，「山地工作委員会」事件“1950／4／25”，あるいは「鹿窟武装基地」事件“1952／12／26－1953／3／3”と呼ばれるものである）[47]．監督である侯孝賢自身が認めていることであるが，戒厳令が解除された1987年の二年後，『悲情城市』公開の1989年の段階においては，二．二八事件については辛うじて取り上げることは可能になっていた[48]．しかし推測として，白色テロにかかわる問題それ自体を独自に提出することについては，さらにまだ検閲への憂慮が必要とされていたと言えるのではないか．

ここでこういう話題を提供したのは，1947年から1949年の二年間の台湾における文化的営為についての重要性を改めて喚起するためである．二．二八事件の暴虐から白色テロの暴虐に移る期間――政治的緊張感が無かったわけではないこの時期に，文学（台湾新文学運動）という言説の枠組みを通じて，外省籍の文学者と本省籍の文学者とが，間接的にではあれ，台湾という場を如何に創造するか（近代中国として？独自の文化圏として？），意識的，無意識的に競い合っていた軌跡が散見されるのである．さらにこの時期，国共内戦が大陸では展開されていたわけであるが，そのことは台湾内部の文学者のヘゲモニー関係にも影響を与えていたことは，『「橋」副刊』

の端々にも現れていたことである．

本稿の目的は，そういった1948年前後の『「橋」副刊』の論争過程を見る中で，台湾内外におけるポスト植民期の言説の枠組みを支配していた独特のヘゲモニーの様態（例えば，「反封建」をめぐる意識のズレの由来としての光復以前の経験の質の差），及びその中で駆動された文化的機制の独特のあり様（例えば，「女性」の受動的，被害者的イメージの使用）を炙り出そうとした．そして，そのことによって，現在までも続く省籍矛盾やアイデンティティー問題（認同問題）の由来やそのイデオロギーのメカニズムが，少しでも明らかなるのではないかと考えている．この試みがどこまで成功したかは，ご批判，ご指摘を待つ他はない．

注

1）Homi K. Bhabha, *The Location of Culture*, Routledge, 1994　P 75 ～ 77.

2）何義麟「光復後初期台湾出版事業発展之伝承与移植（1945 ～ 1950）」『台湾史料研究』呉三連基金会 no. 10　p 4 参照.

台湾新生報は，光復後，省政府に所属するものでもあった．1947年当時の発行人は，日本に留学の経験もある左翼人士，王白淵であった．王白淵は，同年に発行された台湾新生報編の『台湾年鑑』の「文化」欄（P1）も担当しており，当時の台湾における文芸の不振について，一，公用語の転換．二，言論の自由にかかわる範囲の不明瞭さ．三，物価高による紙の不足――など，三つの理由を挙げている．

3）葉石涛『台湾文学史綱』文学界雑誌社　再版 1996／9／5.

4）彭瑞金「『橋』副刊始末」（『台湾史資料研究』呉三連基金会 no. 9　1997）によれば，「『橋』副刊」における外省籍文学者の陣営は，大体の分け方としては，「右」「左」の差異を有していたと述べられている（p 36）．しかし，実際に，ここでの「右」「左」が何を指しているのか曖昧なままである．筆者の見方では，例として，「純文藝」というタームによって表現されていた芸術主義的傾向を擁護する陣営と，それを新文学運動の立場から批判する陣営との間で論争が行われていたようである．全体としては，新文学を志向する陣営が紙上のヘゲモニーを握っていたようである．

5）同上　p 45.

6）エドワード・サイード『オリエンタリズム（上）』平凡社　板垣雄三他訳　1993／6／30　p 40 ～ 41.

7）彭瑞金「『橋』副刊始末」『台湾史資料研究』呉三連基金会 no. 9　1997　p 44.

8）同上「『橋』副刊始末」の注には，「林曙光の『感受奇縁弔歌雷』によれば，歌雷は，1994年に亡くなっている（『文学台湾』11期 1994／7）」と記されている（p 46）.

9）歌雷「刊前序語」『橋』副刊創刊号　1947／8／1.

10）雷石榆「再論新写実主義」『橋』副刊　1948／6／30　no. 133.

11）雷石榆『もう一度，春に生活できることを』池沢実芳・内山加代訳　潮流出版　1995／8／15　以下，来台湾直前の回想の引用.

「こうした政治的暗黒の環境の下では，民族のため，人民の利益のために自己を堅持し，世論の代弁者となるのは容易なことではなく，極めて危険であるとさえ言えます．台湾へ渡り，「光復」「祖国復帰」に乗じて金持ちになった勢力は，必ず国民党系の人物に違いありません．私は臨機応変にうまく身を処しながら，自らの一貫した新情である革命文芸工作に全力を尽くさなければならないと考えたのです」（p 96）

12）欧陽明「台湾文学的建設」『新生報「橋」』1947／11／7　no. 40.

13）『橋』副刊に結集していた外省籍文学者の多くが，また明確にマルクス主義的な言説の枠組みを使用

していたことは，例えば，駱駝英の「新現実主義は，唯物論と歴史唯物論の是非を正し，歴史の発展の方向に合致する階級的立場に立った芸術思想と表現方法に立脚したものである」（『橋』副刊　no. 148　1948／8／4）と述べているような部分にも特徴的である．

14）毓文「打破緘黙談「文運」」『新生報「文芸」』1947／7／23.

15）呉濁流「過去台湾新文藝的運動値得研究」（第一次作者茶会総報告）『橋』1948／4／7　no. 100.

16）楊逵「如何建立台湾新文学」（孫達人訳）『橋』1948／3／29　no. 96.

17）このころの楊逵の文芸活動については，河原功の「楊逵――その文学的活動」（『台湾近現代史研究』創刊号，1978／4），あるいは，下村作次郎の『文学で読む台湾』（田畑書店　1994／1）の第二章に詳しい．『文化交流』については，創刊号で終わってしまっているが，『中国文芸叢書』は，第六号までを発行している．『中国文芸叢書』は，日文，中文を対照させたものであり，この意味でこの時期の文学的営為における言語的困難とその打開の方途を指し示していると言えよう．

（以下，具体的作品名）

第1輯－魯迅作・楊逵訳『阿Q正伝』／第2輯－茅盾作・楊逵訳『大鼻子的故事』／第3輯－郁達夫作・楊逵訳『微雪的早晨』／第4輯－沈従文作・黄燕訳『龍朱』／第5輯－鄭振鐸作・楊逵訳『黄公俊的最後』／第6輯－楊逵作・胡風訳『送報不・』（下村作次郎『文学で読む台湾』田畑書店　1994年　p 135より引用）

18）葉石涛「1941年以後的台湾文学」『橋』no. 104　1948／4／16.

19）葉石涛「序　台湾新文学と魯迅」『台湾新文学と魯迅』（中島利郎編　東方書店　1997／9）所収　p 10　以下引用.

「光復後の一九四五年から四九年の四年間，台湾と大陸中国の往来がまだ途絶えず三〇年代文学もまだ白金にならなかった頃，私は魯迅の小説と雑文を読み，頼和先生を「台湾の魯迅」と称する理由もよく理解できた．文は匕首のように鋭利で，帝国主義と封建主義の病根を指弾する点において魯迅と頼和はともに同様の立場にあった．」

20）当局による言語切り替えの施行日は，日本総督府からの台湾省行政長官公署へと権力が委譲された受降式の日（1945年10月25日）の1年後，1946年10月25日との命令（単行本等を除く）と定められていた．これを受けて，それまで日本語によって表現していた本省籍作家が，創作の機会を奪われたことも事実である．こういった言語の切り替えと文学創作との問題は，本省籍作家の危機感となっていたことも確かであり，またそういった一斉的な日本語廃止への不満が，様々な形で表明されていたことも事実である．

21）呉濁流「日文廃止に対する管見」『新新』1946／10／17　no. 7　p 12.

22）呉濁流『夜明け前の台湾』社会思想社　1972　以下引用.

「ただ，文化のために日文存続は果たして中国文化を阻害するものか，公平な文化の秤にかけて再検討する必要があると思う．私の考えでは，政府機関紙の日文は当然廃止すべきであるが，その代わりに地文新聞や日文雑誌は過渡期といわず自由に発刊しても害がないと思う」（P287）

23）朱実「本省作者的努力与希望」『橋』no. 105　1948／4／23.

24）楊逵「如何建立台湾新文学」（孫達人訳）『橋』1948／3／29　no. 96.

25）林梵（林瑞明）は，「讓他們出土」（『文学界』1984年夏号　p 215～）の中で，「三月的媽祖」「苦瓜」（蔡徳本），「美子与猪」（黄昆彬）など七篇の中国語訳の作品が『橋』副刊に載せられたことを確認している．

26）下村作次郎「付録1　王詩が語る「台湾新文学」」の（注5）『文学で読む台湾』田畑書店　1994／1／31　所収　p 325参照.

27）林曙光「台湾文学的過去現在将来」『橋』no. 102　1948／4／12.

28）楊風「新時代新課題」『橋』1948／3／26　no. 95.

29）宋承浩「発展本島方言文学的文字問題」『橋』no. 203　1949／1／23.

30）林曙光「文学与方言――『台北酒家』読後」no. 141　1948／7／19.

林は，西欧における俗語革命を要約しながら，台湾語による創作への欲望を一定程度は肯定しつつも，国語の普及という命題を優先させる言論を行っている．以下引用．

「『文芸復興』に到って，あの偉大な詩人ダンテが書いた『俗語論』によって，俗語によっても文学創作が可能であるという理論が確立し，さらに，結果としてイタリア語（俗語）によって不朽の名作『神曲』を完成したのである．従って，文学作品において方言を用いるだけではなく，場合によっては，方言を用いることによって更に大きな成功を収めることが出来ると言えるだろう．…〈中略〉…私は，どんな人も閩南語が優秀な言語の一つであると認識するだろうし，閩南語を用いた創作が成功を収めるだろうと信じているが，基本的な歴史的背景からすると，そういったことは，ダンテなど一般的に選ばれた天才において一二例ほど見られるだけであり，また作者が元々別の言語（国語）が使用できない場合を除いては，冒険をしないのが得策であろう．何故なら，閩南語は，音はあるものの字がない場合があり，だから，たとえ天才的な作家が技術上の困難を克服し，独自の一派を形成したとしても，読者は，結局何が書かれているのか分らなくなるだろう．

現在のように，既に時代は，変化している．五四前後において，台湾の作家は，閩南白話文を使用して創作していたが，これは，環境の阻害によって大多数の台湾人が国語を学習することが出来なかったからであり，意図的に異端たろうとしたわけではない．だから，以後台湾において，歴史の歯車を逆にし，流れに逆らって船を漕ぎ，閩南語によって書くことを提唱することはできない．これは，まさに日本語による創作を積極的に提唱することが台湾文学にとってプラスにならないばかりか，マイナスばかりであることと同様に，不必要なことである．

しかし，私は，「現実を曲解せず，現実を軽視しないために」（陳大禹），台湾の歴史的変遷による様々な特殊性の中で最も特殊な方言を使うことには賛成である．しかし，専ら特殊な言語だけに依って特殊な現実を表現することには反対である．だから，方言を使用する前に方言対して深い認識と把握があって，それではじめて技術上の困難がどこにあるかが分かるのである．また，使用において検討と選択を経て，はじめて技術上の困難を克服することが出来るのである．」

（この時期，劇作家，陳大禹（外省人）によって閩南語が使用された劇脚本『台北酒店』が出版されており，『橋』でも多くの評論家によって取り上げられるなど評判を呼んでいた．）

31）蘇新・王白淵その他「談台湾文化的前途」『新新』1946／10／17　no. 7　p 6.

32）台湾資料編纂小組『台湾歴史年表 1945–1965』財団法人張榮發基金会　業強出版社　1993　p44.

33）欧陽明「台湾文学的建設」『新生報「橋」』1947／11／7　no. 40.

34）楊逵「如何建立台湾新文学」（孫達人訳）『橋』1948／3／29　no. 9.

35）朱実「本省作者的努力与希望」『橋』no. 105　1948／4／23.

36）朱実「本省作者的努力与希望」『橋』no. 105　1948／4／23.

37）呉阿文「略論台湾新文学建設諸問題」『橋』1949／3／8　no. 219.

38）回想記によれば，雷石榆は，1933 年春から 1935 年まで留日の経験があり，左連の東京支部の同人でもあった人物である．雷石榆は，1935 年に，日本語による詩集『砂漠の歌』を刊行している．また，1946 年台湾に渡った後，雷は，「待応生」（女給）に対して風紀取締り通達を出した政府らに抗議する「待応生」の請願団を支援する社説を書いていたらしい（筆者未見）．（雷石榆『もう一度，春に生活できることを』池沢実芳・内山加代編訳　潮流出版社　1995 年 8 月 15 日　p 98 ～ 99 参照）．

39）雷石榆「再申弁」『橋』no. 117　1948／5／24.

40）雷石榆「女人」『橋』no. 109　1948／5／3.

41）彭敏（彭明敏）「建設台湾新文学・再認識台湾社会」『橋』no. 112　1948／4／10.

本文おける雷石榆への反論以外にも，以下のような反論を行っている．ここでは，魯迅の盟友にし

て台湾大学文学院中文系教授，許壽裳が何者かによって殺害された事件（1948／2／18）のことが取り上げられている．

以下，『橋』no. 112　1948／5／10　から引用．

「他に，台湾大学許（壽裳）教授を殺した罪に問われている高萬俥の起訴状にある数千言は，日本奴隷化教育がこの犯罪に及ぼした影響であると論じているが，これは言ってみれば，強盗殺人とは，ただ奴隷教育によって始めて本省社会に出てきたものであるということになる．しかし，実際，この場合，教育の要素の決定因は，経済環境の重要性よりも下に来るものである．これ以外にも，ある人にいたっては，男子学生が女子をからかったり，夜通し遊ぶことも，日本武士道が残した毒ということになっている．」

42）廖秀真「日本植民地統治下の台湾における公娼制度と娼妓に関する諸現象」『アジア女性史――比較史の試み』（アジア女性史国際シンポジウム実行委員会）明石書店 1997／6.

43）同上　p 423.

44）同上　以下引用.

「植民地の被支配者が娼妓問題を女性の議題と考え，その重要性を民族解放問題の下位に置いていたことは明らかであり，それどころか被支配者側の男性は焦りを和らげるために，娼妓を呼んで歌と酒に興じていたのである」（p 423）

45）ポストコロニアル批評の理論家，ガヤトリ・スピヴァックは，サバルタン（下層の女性）が，植民者男性とネイティヴ男性との間の闘争，その実は両者のホモソーシャルな相互連携に利用され，挟み撃ちにされるために，発言権を奪われ続けている事態を強調している（ガヤトリ・スピヴァック「サバルタン研究――歴史記述を脱構築する」R・グハ他『サバルタンの歴史』岩波書店　1998／11／18　所収　p 328～p 338 参照）.

46）四方田犬彦『電影風雲』（白水社　1993／12／6）によれば，台湾大学の呉密察は，李泳泉との共同論文『電影政策与意識框架』（1993 年，民進党文化会議にて発表）の中で，『悲情城市』における二．二八事件と 50 年代白色テロとのタイムラグを論じている，とのことである（p 290）.

47）藍博洲『白色恐怖』楊智文化出版　1993　p 79.

48）侯孝賢（インタビュー）「台湾映画界の星・侯孝賢に聞く　中華文明の蘇生をめざして」（聞き手・解説／宇田川幸洋）『文学界』（45－6）1991／5　p 201 参照.